供ばかりが後に殘ることになりますから、至極結構かも知れませぬが、一軒の家族から考へて見ましたならば、どんなに不幸なことか知れないのであります。（談、文責在記者）

ほんだはらの話

保井コノ

一月のお飾りの一つとしてある「ほんだはら」について私は少し書きたいと思ひます。

「ほんだはら」は、日本の沿海到る所として其種類を産せない所のない海藻であります。我國では古くから、知られて居たもので、此種類に造詣の深い理學博士遠藤吉三郎氏は我古語にある「なのりそのはな」（莫語花）を此藻類の名稱であると申されて居ります。

藻の類は三大部に分たれて居りまして是等は、各其色を異にして居りますから、それによつて、紅藻類、褐藻類、綠藻類と唱へられて居ります。

「ほんだはら」の類は此内の褐藻類に屬するものでありまして、海岸で海水の漸く達する位の場處から餘り深くない海中に生へて居ります。

元旦の飾りに用ふる「ほんだはら」は、乾かしたものでありまして海中にある時は褐色を致して居ります。是は此植物の細胞の中に褐藻素と申す色素を持つて居りまして、普通の植物の葉の細胞内にあるのと等しい葉綠素の持つて居る色を隱して居る爲でありますが、乾いたものでは褐色素が薄くなる爲に綠色を顯はして參ります。

此植物は其體の最下端は圓盤の形をして海中の

岩などに附着して居ります。是を普通に根と唱へますが、花を持つて居る植物の根の樣に是から養分を吸收する樣な事は致しません、只體を一定の場處に固着して置くに止まるのであります。

莖は大層よぢれて居りまして其切り口は四角形或は三角形を致して居ります。此莖から枝を澤山に出しまして二年或は三年で全成長を終へます。葉は御存じの通りに其緣りには切れ込みがありまして其葉の柄の上側に短かき枝を生じて是に小さな球の樣なものを付けて居ります。此球は氣胞と唱へ中空になつて居りまして生きて居る時には其中に一種の瓦斯を含んで居る爲に體は海水中に浮かぶ事の出來るのであります。上部の枝の切口は莖と違つて略圓形をして居りまして葉も小さく軟かでありますから是を汁の實或は酢につけて食用に致します。此枝には前に申した通りに氣胞がありますから食用にしますと、ぶつ〳〵と音がする爲に昔の人が「ななりそ」といつたのから「なのりそ」と轉化して來たのであると古人は此名を解釋せられた事があります。

凡て此樣に莖葉等と申ますけれども、是等は花を持つて居る他の植物と違つて、是等の植物にいふ意味での葉莖等とは意味は全く違つて居るのであります。そして是等のものは其植物の全體の表面から海水中にある養分を吸ひまして是を其滋養分とするのであります。

「ほんだはら」類では其植物が充分に成長しますと或株では枝の一部分に、雄器托と申すものが出來或株では雌器托と申すものが出來ます。此雄器托にて雄器が出來此中に無數の精蟲と唱へて肉眼では見えない程の小さな體が出來是は二本の纖毛を持つて居て熟しますと雄器より出て海水中を游いて歩るきます。そして雌器托には雌器が出來まして此内には一個の卵が出來ます。是は精蟲と比

較すると非常に大きくて肉眼で見得る位それが雌器から出て雌器托の周圍に附着して居ります。ここへ前の精蟲が來て卵といふものとなり、是が海底に落ちてまたもとの植物となるのでありますから花などは持つて居ないのであります。

「ほんだはら」の類はまた總稱を「もく」といはれまして是にいろ〳〵の形容詞がついて「あかもく」「よれもく」「のこぎりもく」「いそもく」等と澤山にあります。それから「なのりそ」から轉じて「莫騎」となり再轉して神馬は祟る故に騎る勿れとの意味より「神馬藻」と漢字をあつるに至り、今日尚出雲越後地方に於ては「じんばさう」又「じんめさう」を以て呼ぶと申す事であります。

「ほんだはら」は、穗俵といふ意味からして、正月の飾りに用ゐらるものでありますが、此外には食用にもなります肥料ともなります。しかし其効用は此點に於ては余り大きいものとは申されませぬ。滋養の價値などは殆ないと申して差支なからうと存じます。が併し此類の植物は我國の沿海に澤山の密林をして居りまして淺海に棲む魚介に對して棲息の場處を與へまた海洋に棲む魚族の爲には放卵の場處を與へるのであります。平常に太洋に棲む魚族も其產卵期に至ると群をなし列をたて、淺海に來り茲にて藻類の多量に繁殖する所を撰んで產卵するのであります。此藻類は重に褐藻類であつて「ほんだはら」類は昆布類に亞いで此點に貢献の多い藻類なのでありますから、直接の効用卽食料とか肥料とかになる事は少くとも充分に保護の道を講ずる必要のあるものであります。

「ほんだはら」類に近い緣故のある海藻で我々の食用とするものには「ひじき」があります。隨分廣く食用とせらるゝものではありますけれども滋養分として、價値はないものであります。又凡て褐藻類には沃土を含む事が多く殊に昆布、あらめ、

かじめの如きものには比較的多量の沃土をもつて居るから是より沃土を製造する事が我國でも隨分盛んでありますから是等のものに近い「ほんだはら」類も沃土製造の原料としては如何と考へられますけれども是は有望でなく其含量は到底工業上收支のつぐのはれるものでないさうであります。是に反して歐州では此科のあるもの卽我國の「ひもつのまた」に近いものからは醋酸を製すると申します。（完）

森の幼稚園（一）

S K 生

一、森の先生

先生が此の幼稚園を開かれてから、もう大分の歳月になります。入口の檜の木を門に利用して、小さな標札が懸けてあるけれども、近所では幼稚園の名をいふ人はありません。森の幼稚園で通つて居ます。同樣に先生の名をいふ人もありませんが森の先生で通つて居ます。

如何にも通稱の示す通り、森の先生に相違ないのです。皆さんが△△△の停車場で電車を降りて南へとつて二三丁行かれると、もう此の森の頭が見えます。以前は何の土地であつたのか、廣い廣い森と、それに連る起伏多い畑地とが、此の幼稚園の敷地なのです。此の廣い敷地の中に、日當りのよい洋風の平屋建と、藁ぶきの家が三軒あります。洋風の方が幼稚園で、藁ぶきの中で比較的大いのが先生の住宅です。先生は此の質素な家に、